

序章 外側へようこそ

美術館の「ざわざわ」と「がやがや」

ドイツやオランダの美術館では、小さな椅子をかかえた小学生のグループや、絵の前のフロアに座って授業を受ける小学生に出会うことがよくあります。ほんものの絵の前で手を挙げては意見を述べあう子供たちを、私はたいへんうらやましく感じたものです。ほかの観客たちは、その場にとどまって「授業参観」してもいいし、その部屋をあとまわしにして次に進めば、授業を邪魔だと感じなくてすみます。もちろん、先生や子どもたちも、むやみに声を張りあげないことが条件にはなりますが。声の大きさを調節して、TPO（時・場所・場合）に対応することは社会生活の基本なので、そういう練習の機会になるかもしれません。

私は展覧会場で、友人や学生たちと絵の前で絵や作者の話をしている、係の人に注意された前科が何度もあります。ですから観客たちの話し方には、暗黙のうちに大まかなルールができています。日本では、それがとくに厳しいように思います。たしかに、声もひそめずに、絵の前で世間話に夢中になるのは困ります。しかし絵についての会話なら、もっと気楽に、ただしTPOを心得たひそひそ声で交わすことは許されてもよいと思うのです。

そういう私も、若い頃は、美術作品はひとりで黙って眺めるのが「鑑賞」の正統なありかただと思っていました。でも、好きな作品の前で気づいたことや感想を話し合うのは、悪いことではないと次第に思えるようになりました。とくに、話し相手と共鳴すればとても嬉しいし、その相手をそれまでよりさらに好きになったりするものだと思ってきました。まるで位牌にご焼香でもするかのように、かきこまて作品に向かうのでは楽しくありません。作品と気楽に向き合い、作品の前で気の合った友人たちと共感を分かち合う、そんな雰囲気、美術館にも欲しいものです。しーん、と墓場のように静まり返っているより、たえずざわざわと、ときにはがやがや、くらいはあってもよいのではないのでしょうか。

展覧会を主催者側からみると

私が「うらわ美術館」の館長をしていたときのことです。それぞれの美術館は、いつも新しい企画を考え、工夫をこらしています。そのなかで、たとえば地元作家を中心にした展覧会では、来館者は作者

と縁故のある人も多くなります。そんな方々とのひそひそ話にも、さすがに現地ならではの貴重な内容もあり、参考資料記載の誤りを指摘していただくことが何回ありました。来館者の発言が、資料の訂正に役立つことがたくさんあったのです。展示期間中に、その誤りを訂正したケースもあったくらいです。要するに、美術館の展示は、かならずしも固定されたものではない、生きているものということかもしれません。

また、ある現代美術の展覧会では、出口にノートを置いて感想を自由に書いてもらいました。小中学生が、レポート作成のために来館していて、「よくわからないものもあったけど、おもしろかった」というメモがいくつもあったものです。現代美術には「わかりにくい」とか「わからない」という感想をもつ人は少なくありません。この事実には、展覧会を催す者として、反省すべき問題が少なくないと思います。

最近では、多くの美術館がそれぞれ工夫し、新しくユニークで、多くの人の興味をひくテーマで企画展をしています。小規模の美術館でも、独自の工夫をこらしていて、本当にめざましいものがあります。そうした努力には頭が下がりますが、それでもなお一般的にはまだまだ「わかりにくい」という感想があることにも注意を払わなければなりません。来館者は「わからない」ということを遠慮なく伝え、主催者はそれに精いっぱい答える努力をする必要があるのでしょうか。

ただし、「わからない」ことのなかには、「わからない」ことの不思議さとか「わかってしまわない」ことの楽しさや魅力もあると、私は思っています。美術館ではさまざまな楽しみかたをしてもらいたい

と思うのです。本書がその手引きとして役立つことを願っています。

暗い美術館より明るい画集

美術館や博物館で、暗くて見にくいと思うことがあるのではないのでしょうか。時代の古い作品展示では、とくにそういうことが多いようです。その理由は、紙や絵の具の劣化を防ぐために照明を控えているというのです。とくに、デッサンのような紙の作品の展示室は極端に暗くなっています。しかし、その照度の基準は欧米にならったもので、日本人のように黒い眼の人には見えにくいのです。虹彩の色素で光の受け方が違うので、黒い眼で見ると、青い眼の人がサングラスをかけたのと同じように見えると考えられます。

一般的に、美術館は黒目の日本人には暗すぎます。よく見えない状態でしか展示できないのなら、せめて見やすいコピーを備えてほしいと思うくらいです。現代では、精巧なコピーが可能なのですから。

画集も、「ほんもの」ではないという意味ではコピー、つまり複製と同じです。最近の画集には、みごとに印刷のものがたくさん出版されています。これまでの撮影技術、印刷技術、そして製本技術では表現できなかった、こまかな部分、色彩、そして全体像などが、かなり忠実に再現できるようになっています。原寸大の画集もあります。複製の最大の特徴は、手に入れやすいということです。場合によっては、暗くてよく見えない作品を美術館の人ごみにもまれながら見るよりも、自分の家でのんびりくつ

ろいで画集を眺めるほうが、じっくり観賞できるでしょう。さらには、電子光学のもたらした拡大・縮小自在で色調変化万能的なデジタルの世界を体験することも有効でしょう。

これらはいわば「にせもの」ですが、「ほんもの」より対象の本質に迫れることもあると思います。

美術に接する選択肢が広がるというのは、嬉しいことです。そして、画像については、もつと考えなくてはならないことが残っています。複製された画像や立体は「にせもの」です。しかし、「ほんもの」と複製との間には、考えなくてはならない難しい問題が存在します。そして、技術の進化も、大きくかわってきます。美術館で「ほんもの」を見ることがは、もちろん大切なことです。また、美術館ならではの独自の企画、工夫を楽しむのもいいものです。ですが、それだけが唯一の美術鑑賞法ではないということも、知っておかねばならないでしょう。

額縁の意味はこんなところにも

美術館でも画廊でも、絵は、額縁に入れて展示されるのが普通と思われてきました。では、なぜ額縁に入れるのでしょうか。額縁の役割として第一に思いあたるのは、作品の保護です。第二には、人が衣装を着けて外出するように、社会的な習慣としての礼儀のようなものではないでしょうか。衣装と同じように額縁も、おしゃれだったり、地味だったり、ド派手に格好つけたりします。つまり、額縁も「絵の表現の一部」ということができそうです。

別の意味を考えた人もいます。スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットの考えはこうです。

絵とは、想像力や幻影という非現実的な世界に属するものであり、物質的な利害打算や欲望の渦巻く現実のなかに漂う「浮島」みたいなものだ。額縁には、現実世界と非現実世界とをはっきり絶縁させる役割がある。絵を掛ける壁は現実の「もの」、そこに掛けられるのは非現実の「絵」。現実と非現実、「もの」と「ところ」、そうした対立的な世界を曖昧にさせないために、額縁が存在する。対立的な世界を曖昧に混在させると「美」の魅力は失われてしまう。

オルテガは、いわば「結界」のような額縁が必要だと考えたのです。つまり、描かれた画布は、壁という現実に向がたれた理想への孔（あな）であり、窓なのだ、とも言っています。額縁は窓枠というわけです。これは、はじめに記した「絵の表現の一部」という考えと、かなり異なっていることに気づきます。オルテガの考えには、「絵画とは、現実と異なるとても大切な世界を表現するものだ」という気持ちが強くなることもよくわかります。

現在、額縁のない絵がたくさんあります。薄い板のような額縁の場合もあります。このことは、絵も特別なものではなくて、現実と同じもうひとつの「もの（オブジェ）」だ、という考えかたが反映されたものだと考えられます。現実と絵の「境目」をなくすこと。それが目的のようです。オルテガのいう「美」とはちがう「美」のとらえかた、「美」と呼んでいいもうひとつの現実としての「もの」の価値の見直しが、額縁のありかたに提出されているといえるでしょう。これは二十世紀になって気づいた「美」の別の一面です。

絵が「わかる」とは？

美術館で、あるいはごく普通の会話で、絵が「わかる」とか「わからない」という言葉をよく聞きます。しかし、最初に考えてほしいのは、好きか、楽しめるかであって、数学や物理学のように「わかるか」どうかの問題ではないということです。このことが、美術館や博物館、その他のイベント、さらには画廊などで絵を楽しむための、最高のコツといってもいいかもしれません。

美術作品の鑑賞は、難しいことではなくて楽しいことです。まずは、身につけた教養を抜きに見てみましょう。教養とは、ひとことという「他人の目・他人の知識」です。他人の目で鑑賞しては、せっかくの絵を目の前にしていても、何も起きないのです。もちろん、教養がとても大切な条件となる場合もありますし、簡単に教養を抜きにして見ることも難しいものです。

でも、ここで一度、頭を空っぽにして、いろいろな知識から逃げまわって、自由自在に作品と向きあってみましょう。相手が国宝でも、名作と呼ばれるものでも、心に響かなければそこに長居しないでいいのです。反対に、訳のわからないものでも、何かひっかかるところがあれば、その理由を探しましょう。大切なのは、相手が何者であれ、自分にとってどうなのか、どんな意味をもっているのか、ということなのですから。

現代美術についても、謎が解けないことがその魅力のひとつ、と受けとめるとよいでしょう。こんな

に訳のわからないものがある、という驚きこそが面白いのです。

「とまどう」を大切に

ピカソの絵を見ると、犬か、猫か、子供か、よく「わからない」と思うことがあるのではないだろうか。しかし、それが犬でなくて猫であるとわかったところで、それで絵が「わかる」ことにはならないでしょう。むしろ、そんなふうに言葉あるいは理屈でわかったつもりになってしまうことで、深みや味わいに到達できなくなるような気がするのです。

ただし、この問題はいたいへん大事なテーマでもありますから、じゅうぶん注意深く議論していかなくてはならないでしょう。絵が言葉に置きかえられるものなら、言葉で伝えたほうが確実です。言葉にならないことがあるからこそ、絵が存在するのです。

何を描いたのかがわからないもの、あるいは、描いたものは鳩や帽子やパイプとわかっていても、なぜここに描かれているのかがわからないもの、現実にはありえない、燃えるキリンや空を飛ぶ恋人たちなど、理屈では理解しにくいものの、理解できないものが、絵にはよく描かれています。いきなりそういうものを見たときのとまどいは、当然です。そのときは、心の揺らぎ、つまり抵抗感、反発、驚き、共感などを含めた感覚と想像力への刺激に、まず注目してみましょう。それらが日常ではあまり感じないものなら、絵の効果としては成功といえます。さらに、それが好ましい感じだったら、大成功です。反発や嫌

悪感が残ったとしても、それも効果のひとつであり、楽しみの一種といえるかもしれません。

もちろん、絵にも、言葉と似た意味、つまり約束ごとで意味を表すものもあります。「約束ごと」は知っていて損はありません。でも、絵を楽しむのは、それを見ている自分自身です。何よりもまず、自分の感覚や気持ちを大切にすることです。さらに、楽しいとか好きとかの気持ちばかりでなく、他の感情があることにも気づきましょう。怖いけれど惹かれる、嫌なのについ見入ってしまうなど、見る人に何かを訴えてくるものはいろいろあるでしょう。それらのひとつひとつに対応することから、何かが始まるのだと思います。そのなかに「面白い」と感じることもあるかもしれませんが。それらを感じとることのできる自分自身のアンテナを育てることが、もっとも大切なことなのだと思います。他人の意見や判断は、そのあとで参考にする程度でよいのではないのでしょうか。

自分なりに楽しめることが「わかる」という意味なのかもしれません。こういう楽しみかたでなくてはならないとか、こういうわかりかたでないと正しくないとかいうことはありません。絵を例に話しましたが、美術作品、広く美術と呼ばれるものすべてにあてはまることだと思います。芸術にはいろいろな楽しみかた、わかりかたがあるのです。気がねなく、自分の楽しみかたを追求してみてはいかがでしょう。「わかるか」どうかよりも、自分が「楽しい」「好き」「面白い」のがよいのだと思います。

偏食しないほうが楽しい

美、傑作、国宝・重要文化財、古典、前衛など、美術界でよく使われている言葉があります。これらは、なんともしかつめらしい響きをもつ言葉です。しかし、緊張する必要はありません。そんな言葉の意味をマスターしようとするより、まずは「好き」とか「面白い」という受けとめかたで絵を見ることがポイントです。

さらに、教養というものが、絵を楽しむのに必ずしも必要な条件でないことを強調しておきます。教養があつてよいことも、もちろんあります。でも、邪魔になることもあるのです。知ることと楽しいと感じることは違うのですから。たしかに、教養を楽しむとするみかたもあります。クイズのように、だれの絵か、時代はいつか、地域はどこかといった謎解きも楽しいでしょう。人物の取り合わせや図柄の意味が、約束ごととして決まっているものもあります。たとえば、聖母マリアは赤と青の衣を身にまとい、老人の近くにライオンがいれば聖ヒエロニムスを表しているなどのように、教養が絵の解釈に役立つことがあります。知ることと親しみも増すことでしょう。好きなものをいっそう楽しむために、本を読んだり、美術館を訪ねたりという行動が、楽しみの幅や深みを増すことも事実です。これは、勉強をしてわかってくると、勉強の楽しみを知ることと似ています。しかし、絵を楽しむことは、成績とか採点などに反映するものではありません。あくまでも自発的なもので、決して強要されるもの

でもありません。教養を身につけるための行動を、勉強のようで楽しくないと感じる人には、おすすめしません。

また、「偏食しないほうが楽しい」ということもできます。それは、「比べてみるとちがいがわかる」という楽しみかたにもつながっていきます。セザンヌやゴッホなどの印象派が好き、広重などの浮世絵が好きというのは、それはそれでよいことなのですが、印象派の絵画と日本画、アフリカ彫刻とギリシャ彫刻、子どもの絵とミロの絵、日本の民芸品とジャワの工芸品というように、ちがったものを比べてみると、それぞれに別の面白味を見つけることがあるからです。

初めは、少し抵抗感があるでしょう。でも、見なれてくると、その面白さのちがいに興味が生まれてくるはずです。何もかもが面白いというふうにはなくなっても、自分の知らないもののなかに、自分にぴったりの好きなものを見つけ出せる可能性があります。いろいろな新しい体験を試みることを、ぜひおすすめします。

Aクラスの作品とBクラスの作品

「わかる」という言葉には、ひとすじ縄ではない複雑な意味があつて、私自身も「わからなく」なることがよくあります。少なくとも美術や芸術は、パソコンや算数がわかるというようなわかりかたでないことはたしかです。また、こういうわかりかたがよい、ああいうのはわかっていない、というよう

な言いかたもできません。「これが作品の意味で、そうでない考えかたは理解が足りないか感性が鈍いのだ」と言う人は、自分は他の人よりも優れた鑑識眼があると表明したい気持ちが働いているのかもしれませんが。

偉そうにこう述べている私も、じつは昔、美術品とか作品とかいわれているものには、客観的に確定している意味や価値があると信じていました。作者がそこに込めた、ある一定の意味や価値がそのなかに含まれていて、その意味や価値を感得する努力が必要だと信じていたのです。確定している意味や価値を共有することが、ものが「わかる」人になること、そして、そういう人になりたいと本気で考えていたのです。その努力の一例を、恥をしのんで白状します。

私の敬愛する美術史の先生方が作品をご覧になっているときは、先生方の言葉や表情を注意深く観察しました。Y先生のごようすから、この作品はAクラス、あれはBクラスといった推測をすることができます。さらに、あとで先生に直接その評価をお尋ねするといったことを繰り返し、先生と同じ評価ができるように努力したものです。あげくのはてには、大学院生の後半には先生の評価をおおよそ読めるようになって（勝手になったと思います）、なんとなく専門家になったような気になっていました。しかし、その後いろいろな美術品に接し、時代や地域などのちがいが、つまり「文化」のちがいを経験するにつれ、少しずつ考えが変わってきました。芸術には、機械や計算で出るようなはつきりした答えはないのではないかと考えるようになったのです。

体験や好みが違うように、これは面白い、これならわかると思っても、その面白さやわかった中身は

ひとりひとりちがうはずです。自分のことでも、何年か前と今とでは感じかたがちがっていますし、その日のうちでも、感じかたが変わることがあるのです。まして、時代が離れていたり、生活条件が大きく異なったりすれば、もののみかたや感じかたが同じであると考えるほうが、不自然です。昔から何度となく、芸術は、時代を超え、人種や年齢や性別を問わず普遍的な価値をもつと聞かされてきたのですが、今は、これはまちがいだと考えるようになっていきます。

「芸術用語」に惑わされない

美術、より広くは芸術について使われる言葉には、クセがあります。「名品」「絶品」「傑作」「優品」「逸品」(これは誤用が通用して、元の意味が忘れられてしまいました)「巨匠」「天才」など、他にもまだまだあります。さらに、「門外不出の」「秘蔵の」「例外的な」「特別な」などの形容を追加することもあります。まるで、商品の売買にも通じるような言葉の一覧です。そんな言葉を使う人は、美術は特別な価値をもつもので、そのよさは言葉に置きかえられない、という思いなのかもしれません。もちろん、その価値をどう表せばよいかわからないので、ついついそういう言葉を使うようになったということもあるでしょう。もうひとつには、見る人にもそれを味わう才能や資格が備わっているはずだし、そうでなければならぬというような、それらの言葉を使う人の自己主張が含まれていることもあるようです。

「美術史」は、十九世紀中期から大学の講義題目になりました。その頃やっと学問として認められたということでしょう。しかし、学問になったといっても、美術を鑑賞・研究できる人は限られていました。鑑賞や研究の対象となる「もの」を持っているか、あるいは持っている人を知っているか、あちらこちらのお寺や教会を何度も訪ねるゆとりがあるか、などがものをいう世界でした。必然的に、そのような時間とお金のある人たちが、学問の中心となっていくます。すでにそういうチャンスをたくさん持っている人には、かなわないところがあったのです。

たとえば、ある人がAという絵を見て「これまでにない傑作だ」と言ったとき、「きみはPもSも見えないのに、どうしてそんなことが言えるのか」と言われてしまうと、議論にもならないのです。PやSという絵を見るためには、人に紹介してもらうとか、特別な許可や手続きがいるとなれば、PやSを見ること自体が特権的なこととなります。たとえば、お茶の席で秘蔵の品が紹介されたりします。そのお茶の席に参加できなければ、名品と呼ばれる茶器や掛軸を見るチャンスがありません。そういう茶人との交流も必要になるのです。

美術の歴史、いわゆる美術史とは、そういう人たちが築いてきた「特殊な学問」でもあります。美術界では、職人や農民、あるいは日常生活に追われる庶民やその妻たちなどが、美術史をつくってきた人たちと同じ美的感覚をもっているということが、前提とされてきました。この前提を、あなたは認めることができるでしょうか。芸術用語に特殊なところがたくさんあるのは、そういう人々と、そういう人々の活躍した時代のクセが、まだまだたくさん残っているからだとは私は考えています。

絵を見ることは「謎」とともにあること

スキ、クライ、ウヒヤー、フーム、ゲツ、オエツなどなど、絵を見てどう感じようと、それは見る人の自由です。ですが、あいかわらず、この絵はこう見るべきだ、こう感じられないのは鈍感だ、無教養だ、見る資格なし、などの声も聞こえます。

私もじつは、本当は絵がわからないのではないか、その能力がないのではないだろうか、何度も落ちこんできました。今でもそれはあります。しかし、たくさんの絵を見ているうちに、いつの間にか「わからない」ということも含めて、自分なりの好みや判断がはっきりしてきたように思います。

時代や地域の異なるものに出会って、驚いたり、あきれたりします。そういう対象でも、何度か見ているうちに馴れることができます。馴れるうちに好きになることもあるのです。そうなればもつといいでしょう。見られないヘンなものにであつたら、いきなり拒否しないでちょっとガマンして見続けてみてください。好ましく思える部分を探してみてください。これはあくまでも私のやりかたに過ぎないかもしれませんが、それでもぜひおすすめしたい「みかた」です。とにかく、もう少しだけ、向き合ってみることをおすすめします。

それでも、どうにも好きになれないものもたくさんあります。しかし、好きになったもののほうが、もっと多いのです。好きなものが多ければ、楽しみも多くなります。真面目で厳格な人は、半端な印象

や曖昧な気分にいるのは不快で不誠実だと思うかもしれません。ただ、黒白をはっきりさせることが正しい、誠実だ、といえるかどうかはまったく別の問題です。単純な割り切りができないものの多い世界、それこそが、文化です。ひとつひとつの物に、ひとりひとりの心の働きに、曖昧で複雑なものが深くわだかまっています。言葉や数字に置きかえられない何か、いつも気持ちにひっかかるのです。そのわだかまり、謎でもある何か、絵の楽しみの一部のように、私には思えてなりません。

こうした絵に対する鑑賞の最後に、「ほんもの」と「にせもの」についてかんたんにふれておきましょう。画集の絵は「にせもの」ですか？ それとも「本物」ですか？

「ほんもの」を見たいというのはごく自然な人情です。でも、時を経て退色したりひび割れたりしても、「ほんもの」ならばそれはそれでありがたいものなのでしょうか。「ほんもの」の作者がそっくり同じものを作ったら「にせもの」でしょうか。「にせもの」に感動したらだまされたことになるのでしょうか。作品保護のために暗い照明で見られない「ほんもの」と、明るいライトのもとで撮影された複製と、どちらを尊重しますか。レプリカと呼ばれているものも「にせもの」のひとつです。ただ、呼び名が変わると心象はちよつと変わってきますが。考えれば考えるほど、わからなくなります。私たちは、鑑定と鑑賞を分けていいと思います。「ほんものかどうか」の鑑定は専門家に任せて、鑑賞を楽しむほうがいいのではないのでしょうか。

大事なものは、そんな迷いがかかえながらも、とにかく美術の世界に素直にふれていってほしい、ということです。そこには、まだまだ知られていない、すぐれた興味深い作品やら、人やら、現象やらが、

たくさん秘められています。美術史のこれまでの常識とは少しちがう、そんな光のあたってこなかった外側の世界について、この本ではあれこれとりあげていこうと思います。

「美術史とその外側」へ、ようこそ！